

音楽科における「深い学び」と well-being に関する研究

—小中学生の尺度モデル構成・調査結果の分析を通して—

高橋 雅子^{*1}・沖林 洋平^{*2}・石田 千陽^{*3}・白地めぐみ^{*4}・藤原 由佳^{*5}

Research on “Deep Learning” and “well-being” of Music Education:
Composition of Scale Models and Analysis of Survey Results

TAKAHASHI Masako^{*1}, OKIBAYASHI Yohei^{*2}, ISHIDA Chiharu^{*3}, SHIRAJI Megumi^{*4}, FUJIWARA Yuka^{*5}

(Received August 3, 2023)

キーワード：音楽科における「深い学び」、well-being の構造、PERMA 理論、well-being の尺度開発

はじめに

well-being は、1946 年の WHO による健康の定義 “Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.” (健康とは、肉体的、精神的及び社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病又は虚弱の存在しないことではない。) に登場した。well-being が近年注目されるようになった背景としては、国際的な 2030 年に向けた教育に関する取組「Education2030」事業：OECD (経済協力開発機構) の存在がある。これは、知識、スキル、態度・価値を一体的に捉え、これからの時代に求められるコンピテンシー (行動特性) を検討し、時代の変化に対応した新たな教育モデルの開発を目指している。

国連による World Happiness Report においてフィンランドは 4 年連続第 1 位となったことから、well-being 研究は、児童・生徒のメンタルヘルスを中心とした心理学的研究、教育実践報告、新しい働き方、子育てと地域の問題等、同国と我が国との比較研究も多く存在する。国立教育政策研究所は、2017 年に『PISA2015 年調査国際結果報告書 生徒の well-being (生徒の「健やかさ・幸福度」)』をまとめた。教育では理科・体育・ICT と well-being についてのみ分析されているが、well-being の視点から国際比較結果が公表されたことは特筆される。一方、音楽の well-being 研究は、音楽療法や精神医学との関連、障害者や高齢者を対象とした研究が多く、わずかに実態調査が存在しているのみである。中教審は、子どもたちの well-being の実現に向けて「自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付ける」資質・能力を育むために、平成 29 年の『学習指導要領』の着実な実施が重要であると位置付けている。

本研究の目的は、音楽科における well-being の構造を明らかにした上で、音楽科における well-being の質を測定する尺度開発を試みることである。

1. well-being の構造研究

1-1 音楽科における「深い学び」の構造図

筆者らは、これまでの研究において、学習の質や内容に焦点をあてる「深い学び」を理論的に解明していく鍵は、高等教育の授業改革で注目を集めてきた「アクティブ・ラーニング (学習の形態に焦点を当てる)」を「内的活動における能動性」から捉え直したディープ・アクティブラーニング理論であるとの仮説のもと、尺度開発の研究を進めてきた。2019 年の「音楽科における『主体的・対話的で深い学び』に関する研究 (2)」では、ディープ・アクティブラーニング理論から「深い学び」の構造について言及してきた。

*1 山口大学教育学部音楽教育選修 *2 山口大学教育学部小学校総合選修 *3 山口大学教育学部附属山口小学校
*4 山口大学教育学部附属光中学校 *5 山口大学教育学部附属光小学校

音楽科における「深い学び」の構造図を図1に示す。

図に示したLBは Learning Bridging の略で、「複数の学習を架橋すること」を意味している。

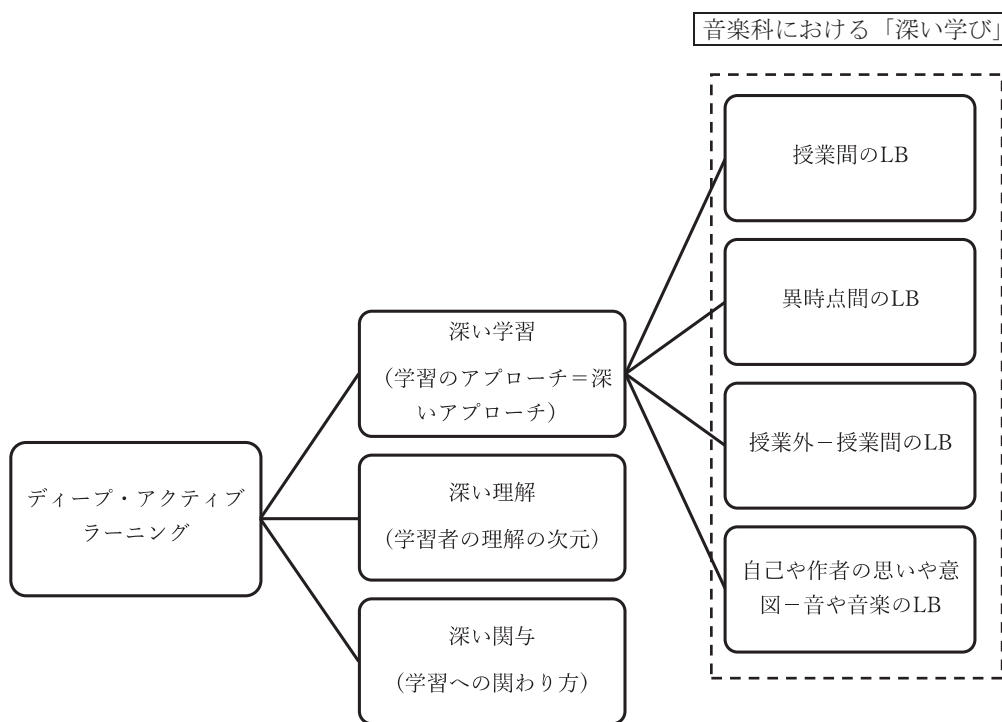


図1 音楽科における「深い学び」

1-2 音楽科における「深い学び」とwell-beingの構造図

図1をもとに、音楽科におけるwell-beingの構造を検討した結果、「異時点間のLB」の中でもこれからの学習につながるLBと「授業外-授業間のLB」がwell-beingの育成に繋がるのではないか、という結論に達した。音楽科における「深い学び」とwell-beingの構造図を図2に示す。

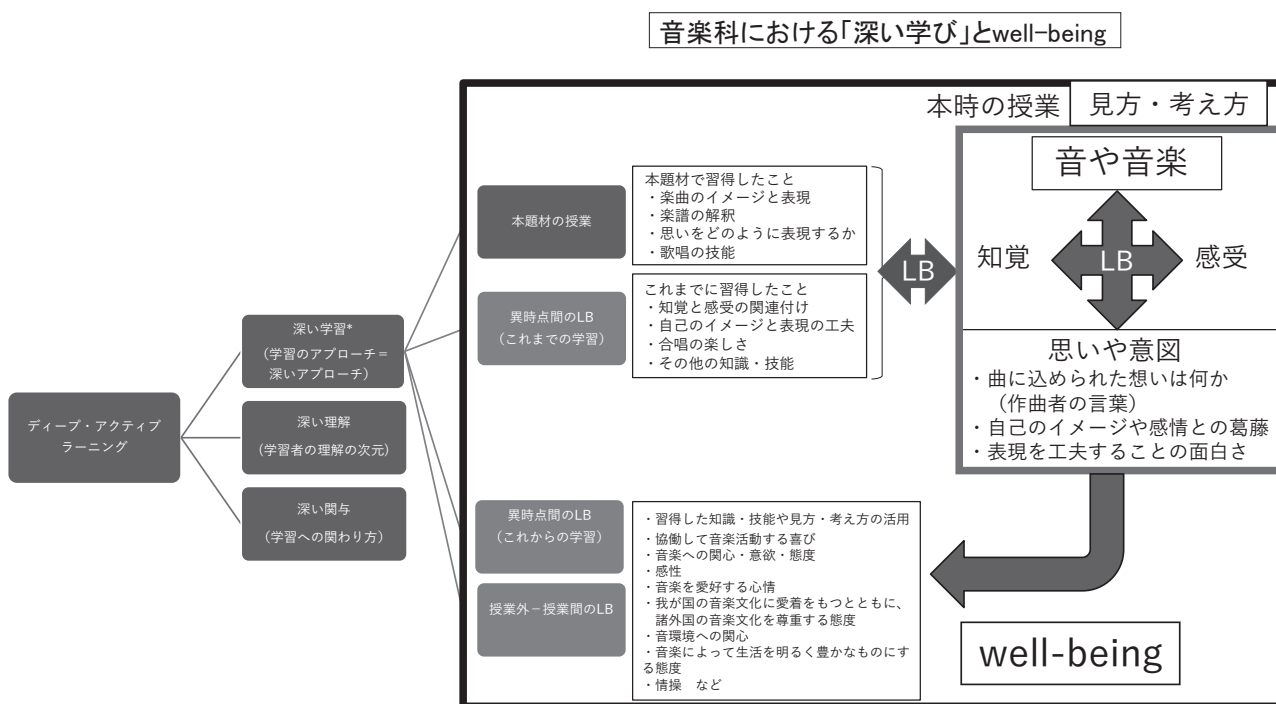


図2 音楽科における「深い学び」とwell-beingの構造図

2. 尺度開発

2-1 音楽科における「深い学び」尺度からの項目抽出

高橋ら（2021）は、「合唱におけるオンライン授業に関する一試論—学習態度と Zoom 利用意識の分析—」において、音楽の学び経験の自己評価を測定するために開発した児童生徒版音楽の「深い学び」尺度（高橋ら、2019）を研究用に改良し（「授業間 LB」「異時点間 LB」「音楽科独自の LB」の 3 因子）、平成 29 年の『学習指導要領』に示された評価の 3 観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」）、「協同学習」について項目を検討した上で、Zoom の困難さに関する 5 項目（「ハーモニーを感じる曲が歌いたかった」「音質に問題があった」等）を加えた。これらの項目から、下記の well-being につながる項目を抽出した。

（1）音楽科独自

- ・合唱の演奏をとおして、自分の思いや意図を表現することができた
- ・作曲者の思いに共感して合唱することができた
- ・授業に主体的に取り組むことができた

（2）有用感・効力感

- ・この曲の終わりの授業では、初めの時期よりもその曲を演奏したいと思う
- ・この曲の授業（演奏や練習）をとおして、ますます練習の必要性を感じるようになった

（3）音楽の楽しさ

- ・この曲の授業（演奏や練習）をとおして、だんだん授業が楽しくなった
- ・この曲の終わりの授業では、初めの時期よりもその曲の学びが楽しい
- ・この曲の授業（演奏や練習）をとおして、曲のことをますます知りたくなった
- ・生活の中にある合唱や音環境への関心を持つことができた

（4）没入感

- ・合唱を演奏していると、音楽と一体になったように感じる時がある
- ・完全に合唱に没頭すること、私の意識全体を鮮やかに変化させるように感じる時がある
- ・人々が心を変える音楽体験について語るとき、それが何を意味しているか理解できる
- ・合唱を演奏することで、他の人々とより繋がっているように感じる

（5）その他

- ・協働して音楽表現する喜びを感じることもできた
- ・音や音楽の世界を価値あるものとして感じ取ることができた

これらの項目をもとに調査・因子分析を行った結果、想定した因子に分かれなかった。各項目の共通性・関係性が強いことが原因と推測される。

2-2 マーティン・セリグマン (Seligman, Martin E. P.) の PERMA 理論

現在の well-being は、医学的 well-being を起点に、快楽的 well-being と持続的 well-being を組み合わせたアプローチが多いと言われている。ポジティブ心理学の創始者、マーティン・セリグマンによる PERMA 理論等がこれにあたる。セリグマン（2014）は、well-being を構成する 5 つの要素として以下の 5 つを挙げている。（pp. 33-42）

- ・ P (Positive Emotion, ポジティブ感情)
- ・ E (Engagement, 没頭・物事への積極的な関わり)
- ・ R (Relationship, 関係性)
- ・ M (Meaning, 意味・意義)
- ・ A (Achievement, 達成)

これらは、「それぞれを向上することで、個人、組織、国家の繁栄を図ることができる」「どれひとつとして単独で well-being を定義する要素はないが、各要素が well-being に寄与する」とされている。

そこで、音楽科における well-being の尺度開発にあたり、PERMA 理論をもとに検討し直すことにした。

2-3 音楽科における well-being 尺度

表1に、音楽科における well-being 尺度を示す。なお、要素欄は仮説として設定した PERMA 理論の頭文字である。

- ・ P (Positive Emotion, ポジティブ感情)
- ・ E (Engagement, 没頭・物事への積極的な関わり)
- ・ R (Relationship, 関係性)
- ・ M (Meaning, 意味・意義)
- ・ A (Achievement, 達成)

表1 音楽科における well-being 尺度

	well-being尺度	要素
1	鑑賞や表現の活動において、むずかしいことでも頑張れば解決することができる	P
2	この曲の授業（表現や鑑賞）をとおして、だんだん授業が楽しくなった	E
3	仲間と協力して、鑑賞や音楽表現する喜びを感じることができた	R
4	鑑賞や表現の活動をとおして、自分の思いや意図を表現することができた	A
5	授業に自ら進んで取り組むことができた	E
6	音や音楽の世界は、価値あるものだ	M
7	音楽の授業では、なにごとにも良いほうに考える	P
8	音楽の授業で新しいことを学ぶことが大好きだ	E
9	鑑賞や表現の活動をしていると、音楽と一体になったように感じる時がある	E
10	仲間に受け入れられている	R
11	作曲者の思いに共感して、鑑賞や音楽表現することができた	A
12	生活の中にある音楽や音環境の存在は大切だ	M
13	鑑賞や表現の活動において、自分の取り組みに満足している	P
14	音楽に集中すると我を忘れ、あるいは意識全体が鮮やかに変化したように感じることもある	E
15	ペアやグループ活動で自分のことを心から気にかけてくれる人がいる	R
16	この曲の授業（表現や鑑賞）をとおして、音楽のことをますます知りたくなった	A
17	鑑賞や表現の活動をとおして、喜びや幸せを感じる	P
18	人々が心動かされる音楽体験について語る時、それが何を意味しているか理解できる	E
19	鑑賞や表現の活動をすることで、他の人々とより繋がっているように感じる	R
20	音楽の授業で、自分のやっていることは有益で価値のあることだ	M

2-4 自尊感情、レジリエンス調査項目

筆者らが開発した音楽科における well-being 尺度の調査と併せて、自尊感情・レジリエンスに関する調査を実施した。表2に、自尊感情尺度を示す。

表2 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982)

		当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	少し当てはまる	当てはまる
1	少なくとも人並みには、価値のある人間である	1	2	3	4	5
2	色々な良い資質をもっている	1	2	3	4	5
3	他者と比べてあまり優れていないと思うことがある	1	2	3	4	5
4	物事を人並みにはうまくやれる	1	2	3	4	5
5	自分には、自慢できるところがあまりない	1	2	3	4	5
6	自分に対して肯定的である	1	2	3	4	5
7	だいたいにおいて、自分に満足している	1	2	3	4	5
8	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	1	2	3	4	5
9	自分はあまりよくない人間だと思うことがある	1	2	3	4	5
10	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	1	2	3	4	5

表3に、レジリエンス尺度を示す。

表3 レジリエンス尺度 (石井・無藤, 2005)

		全く当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	よく当てはまる
1	失敗したとき自分のどこが悪かったか考える	1	2	3	4
2	むずかしいことでも解決するために色々な方法を考える	1	2	3	4
3	なぜそうしたのか行動を見直すことがある	1	2	3	4
4	失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する	1	2	3	4
5	困ったことが起こるとその原因を考える	1	2	3	4
6	つらいときや悩んでいるときは自分の気持ちを人に話したいと思う	1	2	3	4
7	寂しいときや悲しいときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う	1	2	3	4
8	迷っているときは人の意見を聞きたいと思う	1	2	3	4
9	嬉しくてたまらないときは自分の気持ちを人に話したいと思う	1	2	3	4
10	自分の考えを人に聞いてもらいたいと思う	1	2	3	4
11	人からの助言は役立つと思う	1	2	3	4
12	なにごととも良いほうに考える	1	2	3	4
13	困ったことが起きてもよい方向にもっていく	1	2	3	4
14	困ったとき考えるだけ考えたらもう悩まない	1	2	3	4
15	困ったときふさぎこまないで次の手を考える	1	2	3	4

3. 調査方法と分析結果

3-1 調査方法

本研究の調査方法は、次の通りである。

【調査時期】

本調査は、2023年1月16日～20日（研究授業前）、1月23日（研究授業直後）に実施された。

【調査対象者】

本調査の対象者は、附属光小学校5年生22名（男子8名、女子14名）、附属光中学校2年生27名（男子13名、女子14名）。因子分析にあたっては調査対象者全員（附属光小学校5年生、附属光中学校2年生）のデータを使用し、その因子を適用し、分析・考察を行なった。

【調査項目】

本研究では、新たに開発した音楽科における well-being 項目を使用した。尺度作成にあたっては、高橋ら(2021)・RERMA 理論を尺度構成のベースにした。回答は、5件法（当てはまらない1、とても当てはまる5）であった。併せて、自尊感情尺度（5件法）・レジリエンス尺度（4件法）項目の調査も実施した。

【分析方法】

本研究の分析には、jamovi を用いた。

3-2 分析結果の全体傾向

分析結果の全体傾向を、表4・表5及び図3（研究授業の事前調査）・図4（研究授業の事後調査）に示す。

表4 要約統計量

要約統計量				
	N	平均値	中央値	SD
well-being_事前	48	3.85	3.83	0.55
well-being_事後	48	3.85	3.85	0.71
自尊感情	44	2.73	2.8	0.67
自己志向性	45	3.32	3.4	0.44
関係志向性	45	2.97	3	0.67
楽観性	45	2.8	2.8	0.59

表5 well-being の四分位得点

	下位25%	50%	上位25%
well-being_事前	3.44	3.83	4.22
well-being_事後	3.45	3.85	4.30

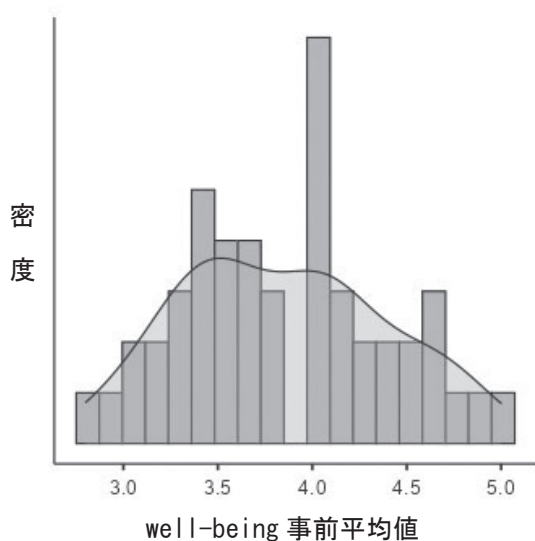


図3 well-being 事前調査

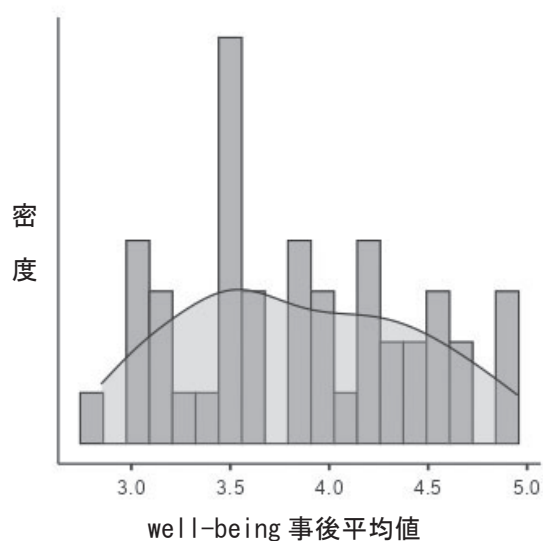


図4 well-being 事後調査

3-3 事前調査による well-being の因子分析（プロマックス回転，最尤法）

表 6 に、事前調査による well-being の因子分析結果を示す。

表 6 事前調査による well-being の因子分析結果

番号	項 目	因 子				共通性
		1	2	3	4	
9	鑑賞や表現の活動をしていると、音楽と一体になったように感じる時がある	0.74				0.51
3	仲間と協力して、鑑賞や音楽表現する喜びを感じることができた	0.7	0.62		-0.53	0.05
19	鑑賞や表現の活動をすることで、他の人々とより繋がっているように感じる	0.6				0.58
15	ペアやグループ活動で自分のことを心から気にかけてくれる人がいる	0.54		0.32		0.57
16	この曲の授業（表現や鑑賞）をとおして、音楽のことをますます知りたくなった	0.48		0.34		0.26
2	この曲の授業（表現や鑑賞）をとおして、だんだん授業が楽しくなった	0.46				0.51
12	生活の中にある音楽や音環境の存在は大切だ		0.73			0.46
6	音や音楽の世界は、価値あるものだ		0.7		0.53	0.07
20	音楽の授業で、自分のやっていることは有益で価値のあることだ		0.48			0.48
7	音楽の授業では、なにごととも良いほうに考える	-0.35	0.39	0.98		0
13	鑑賞や表現の活動において、自分の取り組みに満足している			0.54		0.57
1	鑑賞や表現の活動において、むずかしいことでも頑張れば解決することができる			0.4		0.67
17	鑑賞や表現の活動をとおして、喜びや幸せを感じる	0.5			0.65	0.14
18	人々が心動かされる音楽体験について語るとき、それが何を意味しているか理解できる				0.59	0.51

3-4 well-being の因子と自尊感情・レジリエンスの関連性と因子の命名

表 7 に well-being の因子と自尊感情・レジリエンスの関連性を示す。

表 7 well-being の因子と自尊感情・レジリエンスの相関

	well-being 因子1(a)	well-being 因子2(b)	well-being 因子3(c)	well-being 因子4(d)
well-being 因子1(a)	—			
well-being 因子2(b)	0.5	***	—	
well-being 因子3(c)	0.54	***	0.48	***
well-being 因子4(d)	0.64	***	0.6	***
自尊感情	0.22		0.35	*
自己志向性	0.35	*	0.42	**
関係志向性	0.61	***	0.27	**
楽観性	0.22		0.38	*

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 7 は、レジリエンスを「自己志向性」「関係志向性」「楽観性」と捉え、well-being の因子と自尊感情・レジリエンスの関連性を示している。因子 1 は「関係志向性」「自己志向性」と関連が強く、因子 3 は「自己志向性」「楽観性」「自尊感情」と関連が強いこと、因子 4 は「自己志向性」「関係志向性」と関連が強いことが明らかである。

表 8 に、因子の命名を示す。

因子 1 は「音楽と一体になったように感じる時がある」「他の人々とより繋がっているように感じる」から「心の繋がり（音楽や他者）」、因子 2 は「意味」「価値」から「意味・意義」、因子 3 は「なにごとにも良い方に考える」「満足している」「解決することができる」から「ポジティブ感情」、因子 4 は「喜び」「幸せ」「心動かされる音楽体験」から「音楽への没入」と命名した。

表 8 因子の命名

因子	因子名
因子 1	心の繋がり（音楽や他者：R）
因子 2	意味・意義（M）
因子 3	ポジティブ感情（P）
因子 4	音楽への没入（E）

3-5 クラスタごとの因子別の平均値

クラスタごとの因子別の平均値を図 5・図 6 に示す。因子を実験参加者内要因（4）、クラスタを実験参加者間要因（2）とする 2 要因分散分析を行った。因子の主効果 ($F(3, 132)=4.93, p < .001$) とクラスタの主効果 ($F(4, 44) = 20.59, p < .001$) は有意であったが 2 要因の交互作用は有意ではなかった ($F(3, 132) = 0.19, ns$)。全体的に高いクラスタ 1、全体的に低いクラスタ 2 の 2 クラスタが妥当であった。

図 5 は、事前調査の平均値である。

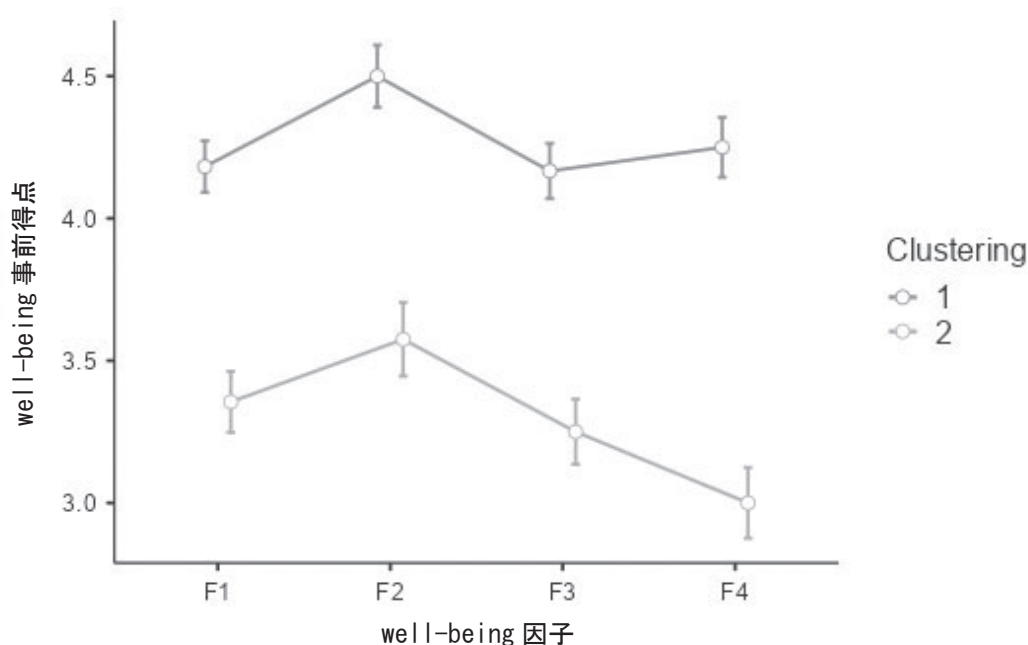


図 5 クラスタごとの因子別の平均値（事前調査）

図 6 は、事後調査の平均値である。クラスタ 2 の因子 4（音楽への没入）が事前調査と比較して高くなっていることは特筆される。

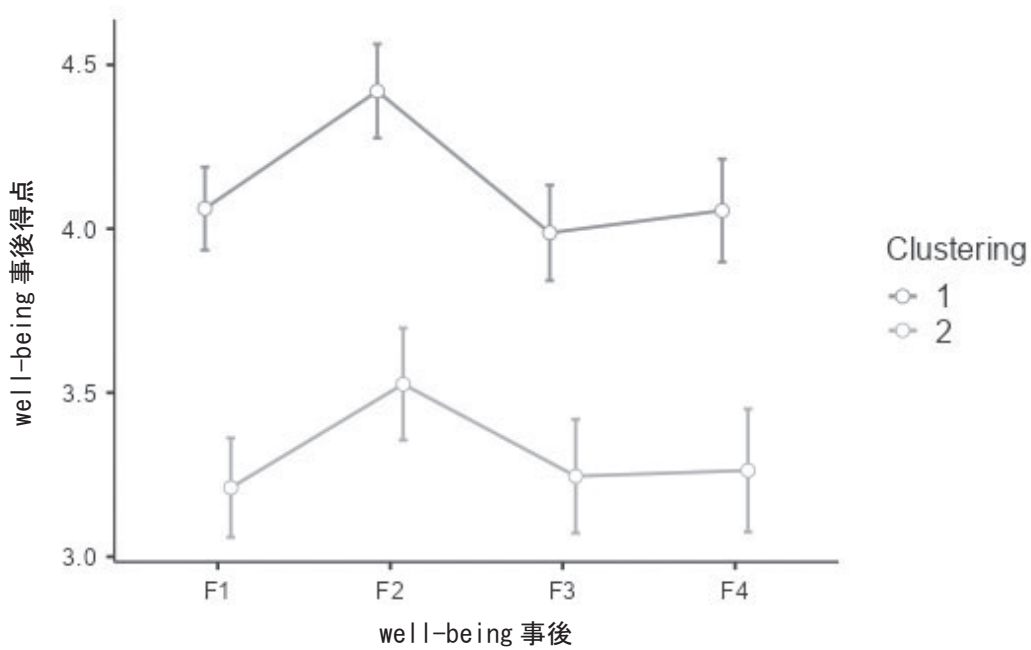


図6 クラスタごとの因子別の平均値（事後調査）

3-6 クラスタごとの事前事後による因子の平均値の変化

クラスタごとの事前調査・事後調査による因子の平均値の変化を図7に示す。図7は、図5と図6をまとめたものである。因子を実験参加者内要因(4)、クラスタを実験参加者間要因(2)とする2要因分散分析を行った。因子の主効果 ($F(3, 138) = 6.25, p < .001$) とクラスタの主効果 ($F(1, 46) = 105.24, p < .001$) は有意であったが2要因の交互作用は有意ではなかった ($F(3, 138) = 1.69, ns$)。

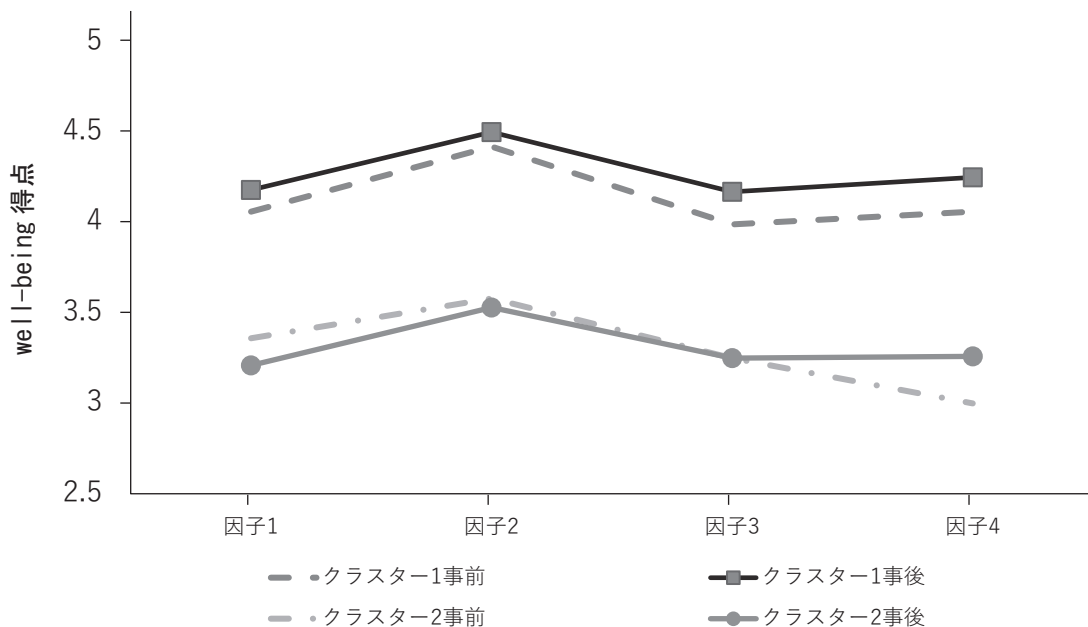


図7 クラスタごとの事前事後による因子の平均値の変化

研究授業の事後調査において、事前調査よりも因子4「鑑賞や表現の活動をとおして、喜びや幸せを感じる」という音楽の喜び、「人々が心動かされる音楽体験について語るとき、それが何を意味しているか理解できる」という没入感項目の数値が高くなったことは、well-being を目指した研究授業の成果として評価できるのではないだろうか。

おわりに

これまで筆者らが開発した「深い学び」の項目から well-being の尺度を抽出して分析した結果、各項目の共通性・関係性が強いことから想定した well-being の因子に分かれなかった。そこで本研究では、先行研究の中でもマーティン・セリグマンの PERMA 理論をもとに尺度を検討した。因子分析の結果、PERMA 理論の A (Achievement, 達成) 以外の 4 因子が抽出された。

また、クラスタ分析の結果、全体的に高いクラスタ 1、全体的に低いクラスタ 2 の 2 クラスタが妥当であった。研究授業の事後調査において、事前調査よりもクラスタ 2 の因子 4 「鑑賞や表現の活動をとおして、喜びや幸せを感じる」という音楽の喜び、「人々が心動かされる音楽体験について語るとき、それが何を意味しているか理解できる」という没入感項目の数値が高くなったことは、well-being を目指した研究授業の成果として評価できるのではないだろうか。このように、本研究では音楽科における well-being の尺度を開発し、その側面から授業の実態をある程度明らかにすることを試みた。マーティン・セリグマンの PERMA 理論をもとに尺度を検討した結果、A (Achievement, 達成) 以外の 4 因子が抽出されたことから、今後は A (Achievement, 達成) の因子につながる尺度を検討していく。また、well-being 項目を精査していくこと、調査を重ねることで well-being の実態を明らかにし、音楽の授業改善につなげていきたい。

引用・参考文献

- 高橋雅子・沖林洋平 (2023) : 「合唱における『深い学び』と没入感に関する研究—尺度モデル構成・調査結果の分析を通して—」, 『山口大学教育学部研究論叢』, Vol. 72, pp. 265-274.
- 高橋雅子・沖林洋平・石田千陽・門田集二・品川美佐枝・金光修一 (2021) : 「歌えない子どもたちの心理的ストレスに関する研究—コロナ禍における尺度のモデル構成・調査結果の分析を通して—」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, Vol. 52, pp. 11-21.
- 高橋雅子・沖林洋平 (2021) : 「合唱におけるオンライン授業に関する一試論—学習態度と Zoom 利用意識の分析—」, 『山口大学教育学部研究論叢』 Vol. 70, pp. 255-264.
- 高橋雅子・沖林洋平・石田千陽・門田集二・品川美佐枝・金光修一 (2021) : 「音楽科における『深い学び』に関する研究—ディープ・アクティブラーニング理論に基づく尺度開発—」, 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, Vol. 51, pp. 1-10.
- 高橋雅子・沖林洋平 (2020) : 「コロナ禍における合唱活動の不自由感に関する研究—大学生の尺度モデル構成・調査結果の分析を通して—」, 『山口大学教育学部研究論叢』, Vol. 71, pp. 301-310.
- 松下佳代 (2015) : 『ディープ・アクティブラーニング』, 勁草書房.
- 溝上慎一 (2020) : 『社会に生きる個性 自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー』, 東信堂.
- 伊藤崇達 (2020) : 「生徒が回す自己調整学習のサイクルを支援し教科指導と評価を一体的に考える」, Kawaijyuku Guideline, pp. 22-25.
- <https://www.keinet.ne.jp/teacher/media/guideline/backnumber/20/0708/kawaru.pdf> (2022年2月16日確認)
- Martin E.P. Seligman, *Flourish*, A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being
- 邦訳 : マーティン・セリグマン著 / 宇野カオリ訳 (2014) : 『ポジティブ心理学の挑戦 “幸福” から “持続的 幸福” へ』, ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) : 「認知された自己の諸側面の構造」, 『教育心理学研究』, Vol. 30, pp. 64-68.
- 石毛みどり・無藤隆 (2005) : 「中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの 関連」, 『教育心理学研究』, Vol. 53, pp. 356-367.